

《名画の扉》

大川美術館コレクションから



「No.6」

1985年ごろ、ガラス絵
10・0cm×15・0cm

清宮質文

(1917～91年)

静かな色彩の中に淡く透き通った光が差し込んでいます。冷たく、光が透けてきらめく冬のガラスは水のようにもありませんが、画面にはしんと静まり、深く澄んだ空気を通っています。

油彩を用いることも多いガラス絵ですが、清宮質文は透明水彩を好んで用いました。滑らかなガラス面を水彩の具が流れてゆくと、あらかじめ溶き墨を塗り乾かし、墨の粒子や膠(にかわ)分に水彩をなじませ、塗り乾かしては色を重ねて描かれます。裏面に手前

から絵の具を重ね、制作後反転させ、表面から鑑賞します。「版画と直接描く絵との違いは、器楽と声楽の違いのようだ」と例えた清宮にとって、ガラス絵は楽器ではなく自らの身体を直接震わせて奏でる声楽になぞらうものでした。

清宮は、画家、版画家の清宮彬の長男として東京に生まれ、東京美術学校で油彩画を学びます。1953年ごろから画業に専念するようになり、本格的に版画やガラス絵を制作。詩情に満ちた画面を生み出しました。(大谷)